

Title	教育の広場：教えることは学ぶこと：教育・学習の相互行為論
Author	福島, 祥行
Citation	大阪市立大学大学教育. 15 巻 2 号, p.98-99.
Issue Date	2018-04
ISSN	1349-2152
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	大阪市立大学教育後援会顕彰：平成 29 年度「優秀教育賞」受賞
DOI	10.24544/ocu.20180530-002

Placed on: Osaka City University

—— 教育の広場 Education Plaza ——

教えることは学ぶこと——教育—学習の相互行為論

【大阪市立大学教育後援会顕彰 平成29年度「優秀教育賞」受賞】

福島 祥行（大阪市立大学大学院文学研究科）

フランス語圏学の世界と教師

「キミたちは、仕事につくとしたら、ほとんどのばあい、^{ア・ベ・セー}A B Cの教師としてだからな！ 教育に意を用いないとダメだ！」いまから30年ほどむかし、本学で大学院生をやっていたころ、フランス言語学の師匠である森本英夫先生は、お酒とともに——あるいはお酒ぬきに——こうおっしゃったものであった。たしかに、「仏文」というセクションに学び、それぞれプーレストやバルザックやデイドロや冠詞や名詞の性などを勉強してはいても、職につくときには——まだ教養課程があった時代で、大学は外国語ふたつが必修であり、仏文学徒にも就職先があった——、仏文学や仏語学の専門を教える教員ではなく、フランス語の教員として雇用されることがふつうであったからだ。にもかかわらずである。間もなく非常勤講師としてフランス語を教える側となった身は、かつてじぶんの受けた授業を想いだしつつ四苦八苦するのみで、あのころの学生たちには、いまもって申し訳なきが消えない。

着任3年半後の1996年10月、学術情報総合センターが開館したが、この5階には「LL実験室」という部屋が設置されていた——いまは改修されて存在しない——。この部屋は、SONYのLLC-2000MというLL (Language Laboratory) システムとMacintosh Performa 6310を40台備えており、名称こそ「LL実験室」であったが、実質上のCALL (Computer Assisted Language Learning) 教室である。1994年、当時の東京都立大学のCALL教室を視察して以来、CALLの可能性に関心を持ち、CALL教室での授業をのぞんでいた身としては、とうぜんのようにこの部屋の利用を希望することとなり、以後、2003年4月に全学共通教育棟ができて、そのなかの外国語特別演習室

に移動するまで、長期海外出張の年度をのぞく5年半のあいだ、この部屋で授業をおこなうこととなる。それまでフランス言語学だけの一枚看板であった研究テーマに、CALLによるフランス語教育がくわわったのは、もちろんこの経験がきっかけである。たとえば、2006年におこなったシャドウイングについての共同研究が、このCALLシステムを用いたものであった。

教育と研究

はからずも教育と研究の交叉点にたつこととなり、教育が研究となる幸運にみまわれて、ようやく教育に意を用いるという師匠の教えを実践できたわけであるが、このことは、とうぜんのことながら、受講生である学生たちとのかかわりをふかめることにつながっていく。研究面では、ながらく現代フランス語の冠詞システムを中心に、いわゆる「文法」の研究をおこなっていたが、この研究をすすめるうち、結句、文法とは、それをもちいる人と人のあいだに生じる事象であり、文法を研究することは、人と人が如何にして関わりをもつかの研究であるということに行き着いていた。これはつまり、言語の研究は「コミュニケーション」の研究そのものということにはほかならない。1997年の前期に新設された総合教育科目Bの「文化とコミュニケーション」の初代担当者となったことも、コミュニケーションについての思弁を深めるきっかけとなった。そして、このコミュニケーションへの関心は、学生とのコミュニケーションと、学生間のコミュニケーションの重要性に気づかせる。前者は、「コミュニケーション・カード」のようなものを導入することになるとどうじに、「ラーニング・ポートフォリオ」、さらに「ふりかえり reflection」へと発展することになり、後者は「グループワーク形式の協働学習」へと展開されることとなった。くわえて、言語研究が、エスノメソロジーの影響のもと、「会話分析」から「相互行為分析」へとすすみ、言語というものを、私的な存在として、脳内での処理を重視する認知主義から、言語は公的存在であり、社会化されたもの以外は無意味という社会構築主義social constructionismへの思想的転回を経て、文法現象は社会的相互行為の産物であるという研究結果を得るにいたる。この結果は、ただちに教

育一学習に応用され、学習もまた社会的相互行為であるという視点がつくれ、ポートフォリオも協働学習も、たんなる教育的実践にとどまらず、コミュニケーションと相互行為論にもとづく研究テーマとなったのである。そして、この研究、とりわけ「教えあう」さまを、記録動画のmicro分析によって考察した結果は、教師としての自分に決定的影響をあたえた。すなわち、教える存在こそ、もっとも教えられる存在であることが分明になったのである。

教育促進支援機構と地域防災劇団

2003年2月、文学部50周年記念の産物のひとつとして、「大阪市立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構」が発足した。さいしょは事務局員として参加したこの組織であったが、3年後に事務局長に就任する。ちょうど、GP (Good Practice) という文部科学省の競争的資金がおこなわれていた時期であり、教育促進支援機構の活動をもって「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP) に応募したのは、当時の榮原学部長の命によるものであった。ざんねんながら結果は落選であったが、このとき、申請のための会議に大学院・学部の学生委員をいれてよいとの許可が出たことはおおきく、以後、教育促進支援機構の活動は、学生たちが中心となって担っていくこととなる。課外の活動ではあったが、これはひとつのPBL (Project Based Learning) であり、学生たちの立案・運営する企画に、事務局長として10年ほどかかわることとなったことが、また重要な知見をもたらしてくれた。そこにあったのは、「教え手」たらんとする企画リーダーたちの苦悩であり、新入生たちが必ずおちいる落とし穴であり、それでも上回生になると頼もしい教え手となるというさまざまな学びの姿であったが、そして、ここでもまた、「良き教え手は、良き学び手」であることが確認されたのである。

2013年には、芝居を趣味でやっていた経歴から、文化による震災からの復興を研究・実践していた中川眞先生に引きずりこまれたかっこうで、地域防災劇団の創立にかかわることとなる。防災や演劇に関心のある大学周辺の人びとに呼びかけ、あつまった幼稚園児から定年間際の老若男女とともに短期間で芝居をつくり

あげる経験は、コミュニケーション研究に、またしても貴重な知見をあたえてくれた。なにしろ、こどもたちというのは、ほとんど異星人のような存在だったからである。芝居をつくりあげる協働そのものが、防災・減災につながるという研究テーマをもたらしていたのだが、ほとんど異星人であるこどもたちとコミュニケーションをおこない、協働して《意味》を構築していく実践もまた、日常的には得がたい、きわめて教育・研究において示唆に富む経験であった。そして、おとなたちもまた、防災から演劇へ、演劇から防災へと関心をひろげることとなるのである。この地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニーの活動は、現在も大阪市立大学都市防災教育研究センター (CERD) の事業の一環として継続され、ことしの3月には6回目の公演をおこなっている。

かくして、四半世紀をこえる教育・研究活動においてわたしの得た結果は、セネカの言とされる^{ドケンドー}Docendo ^{ディスキムス}discimus、すなわち「教えることは学ぶこと」に集約される。教え手は、つねに学び手であることを忘れてはならない。むしろ、学び手たらんとすることこそが、われわれを教え手たらしめるというべきであろう。ソクラテスを引くまでもなく、「知」は社会的相互行為によって、創発される構築物にほかならないからである。